メイタガレイの栽培漁業を目指して

（標識放流の実施）

本年度もメイタガレイの稚魚（当センターで種苗生産）を5月12日に、県漁協浜村支所海幸丸の協力を得て、浜村沖水深10mの地点に放流しました。放流した稚魚数は2100尾で、内訳は標識稚魚700尾弱（全長9cm）、無標識の稚魚1400尾弱（全長6cm）でした。

放流当日は波が高く、海面からの放流でしたが、稚魚は元気に海底に向かって降下していきました。

（メイタガレイの栽培漁業）

メイタガレイの種苗生産試験は、栽培漁業センターができた昭和56年から行われていましたが、本格的な取組みは3年前からです。

稚魚の育成は、技術的に難しく、全国的に多くの県で取組まれていましたが、なかなか量を確保できないことから、多くが断念していきました。それでも鳥取県では、ヒラメに代わる対象種として期待し試験を続けています。

難しい魚種であるため、生産できる種苗は年によって出来たり出来なかったりですが、特に平成19年冬から平成20年春にかけては、センターの施設改修工事の影響等もあって、神経質な親魚の産卵は、開始が遅れた上、採集量も少ない状況となりました。

それでも種苗生産担当者の涙ぐましい献身的な努力もあり、本年度は3000尾弱の放流種苗を確保できました。

メイタの栽培漁業を進める上で、安定して大量の種苗を確保する技術を開発することが急務ですが、親魚の産卵管理、稚魚の育成等日々努力しています。

（標識放流の再捕結果）

これまでの標識放流結果から、次のことが明らかになりました（図6）。

①平成19年度の稚魚（全再捕報告は18尾）は、放流後2ヶ月目に御来屋沖水深75m、11ヶ月目には美保湾内で再捕されたことから、初期の移動分散が速い。

②3月に美保湾で24.5cmのメイタが再捕されたことから、成長は悪くない。

（今後の取組み）

現在、栽培対象種として取り組まれているのは、沖合域に分布し大量に漁獲されるバケメイタではなく、より灘側に棲息し希少価値のあるホンメイタです。今後も種苗量産化の試験を実施しながら生態を解明し、一日もはやく栽培対象種となるよう調査をしていく予定です。

桁網等で混獲されましたら、栽培漁業センターまでご連絡下さい。

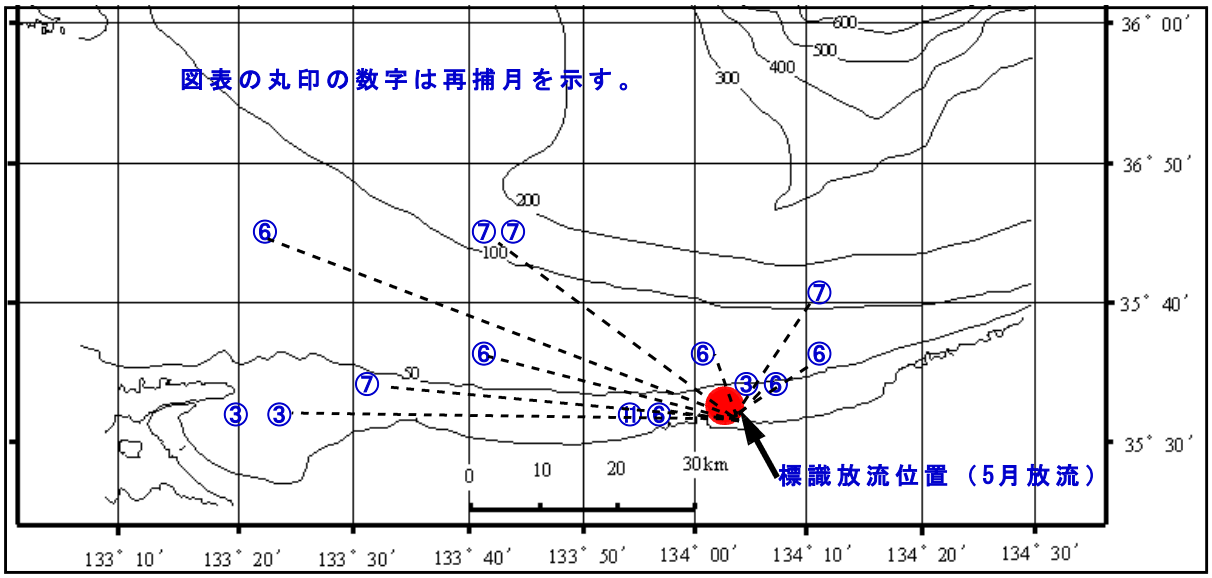

図6　平成19年のメイタ標識魚の移動傾向（放流位置と再捕位置）